

# 沐

# 3

2016

创刊周年纪念



# 秤 初 め

能村 研三

## 天空のカルチャー

秤 初 め 離 島 行 き な る ゆ う メ ー ル

鳥 瞰 の 飛 行 よ り 覚 め 夢 は じ め

撫 で 掃 き と 言 ふ に 留 め て 初 箒

塵 外 の 遊 に 続 き て 稿 始 め

二月の八日から五日間、市川駅前のアイリンクタワー45Fで、市川市芸術団体協議会の主催で「天空の文化祭」が開催された。芸文協に参加する十の団体が、日頃の成果を展示、音楽演奏、民話の朗読などを行ったもので、従来文化会館の会議室で一日限りのイベントで行ったものを、会場を変えたことと、開催時間も、ランチコンサート、夕暮れコンサート、星空コンサートと時間別に断続的にコンサートを行ったので、多くの市民の方々に楽しんでいただけた。

ここでは、市川市俳句協会が五、六年前から俳句の色紙、短冊などを展示する新春展を行っており、今回も四人の会長、副会長の短冊を展示した。

一念は男の反り身寒北斗

大浦郁子句集『奈良団扇』

耳成の裾廻の風や春を待つ

長岡新一句集『青樹海』

初空に霊峰仰ぐ御師の町

能美昌二郎句集『長州砲』

春来る馬関の海へドンと鳴る

富川明子句集『菊鋏』

引算の芸の極みや雪のひま

松本旭先生追悼

真間里へ来駕が形見寒椿

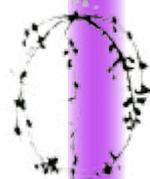
この会場は、六年前の現職時代、最後の仕事として建設に携わった所で、数々の苦勞の思い出もあるが、私にとっては懐かしい所である。

ちょうど、この頃は冬の晴天が続くので、東京の向こうに広がる丹沢や秩父の山々、さらに北側には筑波山が望める。勿論、スカイツリーや東京タワーも見え、江戸川が地図で見るとはるかに蛇行して流れているのには驚く。

ダイヤモンド富士の頃には、アマチュアカメラマンが多く訪れ賑わうが、夕方五時頃には沈みかけた太陽の光が収まると、くつきりとシルエツトになった富士が黒々と浮かびあがる光景は見事である。

同じフロアには、月一度通うNHK学園の教室もあるので、この時も高さ150mからの眺望を楽しみながら教室を行っている。

# 蒼茫集



冬の星

宮内とし子

梟の螺子あるごとく首回す  
埋め戻す土盛り上がる小晦日  
武蔵野の裸木であり雄々しかり  
渾身のちからは赤し冬木の芽  
霜の夜の鍋に渦なす溶き卵  
銀紙のうらも銀紙冬の星

果てといふ

楠原幹子

柚子風呂や濃き一年を振りかへり  
園児らの瞳きらきらクリスマス  
鱈酒に籠のゆるんできたりけり  
果てといふ静謐の景冬夕焼  
煮凝やゆふべの記憶あやふやに  
談合のごと三人の葉喰

寒の星

大畑善昭

初夢の仙境らしきところまで  
筆始すなはち戒名はじめかな  
寒の星大東京の灯をつつみ  
行き帰り見て寒晴れの筑波山  
凍大根つるつる星を照り返し  
たはやすく友は死ににきおでん酒

立心偏

辻美奈子

おほどかに罅割れぬたる飾白  
書初の立心偏の剣なす  
初雀源氏絵巻をこぼれ来て  
初夢の真中に大いなる楯円  
マンゴーの種の平たき年忘れ  
冴ゆる夜を仰ぐ遠吠え心地なる

綱 引 安居正浩

相続の話が待つてゐる湯冷め  
高層に冬日畳の部屋一つ  
まだ闇の手の内にある初景色  
綱引の山を背にした方が勝ち  
餅花に恋のときめきほどの揺れ  
破魔矢持つ手が風を切る肩車

孤 高 藤原照子

何様のお通り銀杏落葉道  
立寄りて道の駅即年の市  
孤独否孤高は難し冬障子  
三脚の定点鴛鴦を待つ湖畔  
樽酒を囲む声高雪の除夜  
除夜詣待つ肩の雪払ひあひ

濡れてをり 林昭太郎

凧を来しか瞳の濡れてをり  
極月の壁に向かひて啜る蕎麦  
寒柝や今あの角であの人で

上下するみづに上下の百合鷗  
魚信来て寒釣の背の綱なす  
これ以上枯れぬ枯野となつてをり

倭へ奔る 千田百里

船上吟三句

数へ日の倭へ奔るうさぎ波  
船に添ひイルカの飛んでクリスマス  
くぢら乗す船なし海に置いて来し  
而して初志の高みに注連飾る  
父母に逢ふ切符は要らず夢はじめ  
隠し持つつむじが二つ冬帽子

重 心 吉田政江

遠くから見る富士が好き寒日和  
凍滝となり重心を失へり  
雪吊の十字懸垂水鏡  
水漬きしを忘るる土手やいかのぼり  
誉めらるることを覚えて冬帽子  
海光の白壁づたひ恵方とす

月の舟 矢崎すみ子

着陸も離陸も地球月の舟  
暁の水の母郷へ白鳥来  
冬座敷「花のワルツ」の時計鳴る  
大年の縁に日当る社寺縁起  
葉牡丹に祝福といふ花言葉  
御嶽山も北岳・富士山も初霞

無尽蔵 甲州千草

無尽蔵の言の葉追うて去年今年  
あの距離は傘が要るはず時雨雲  
凍滝の余白に適ふ日の反射  
胸深き雪は昔よ寒卵  
瓦斯の炎のふと力抜く春隣  
きさらぎやレジ嬢の言聞きとれず

走り根 小松誠一

雪つけし列車より降る国訛  
鷹高く翔べば昂ぶる沖の波  
漣の痕跡しるき氷面鏡

走り根の巖のごとき淑気かな  
手習ひの故紙を火付けにどんど焼  
冬の陽を楯円に映す道路鏡

初 茜 今瀬一博

気つ風よき女の眉や三の酉  
牡丹焚き今大輪のほむら咲く  
牡丹焚き人垣もまた燃ゆるなり  
裸木の王冠のごと灯さるる  
沖は陽の生まるる所初茜  
つま先をはね上げて行く恵方道

エスプレッソ・オレ 荒井千佐代

綾取りの糸のむらさき牡丹雪  
冬珊瑚母性といふは果てしなく  
エスプレッソオレ霜の夜をシベリウス  
結ふほどの髪となりけり寒牡丹  
弥撒了へし信徒生き生き黄水仙  
寒晴れや流木に錆ぶる五寸釘

淑 氣 松井志津子

ゆるやかに波たたみ来る淑気かな  
海蝕の崖に一縷の寒の水  
池巡る何処も白鳥向う側  
老いしともまだとも年の湯に沈む  
踏切渡る人みな寒き背を負ひて  
手を副へて立たすレギンス春よこい

出つ張り岩 久染康子

真ん中の出つ張り岩より瀧凍つる  
突き指に脈の集まる霜夜かな  
波頭一瞬に燃ゆ初日の出  
焼べ足して一時衰ふ浜焚火  
白鳥の群れ発つ湖面吊り上げて  
ばらばらに来て一諸に帰る年賀客

ひとりの音 高橋あさの

寒風の研きあげたる空に月  
霜柱ひとりの音をたてて来る  
秘めごとのあるかに葉かげ寒椿

枯木山ときに羽ばたく音のあり  
迷ひつつ下町ぬける福詣  
ゴムの木にやどる小草や春隣

力抜くこと 柴崎英子

ランチの椅子紅葉明かりの湖へ向き  
天心に日の止まれり枯蓮田  
梟の掬あるごと振り向かず  
ひたと定まる少年の独楽の芯  
無心とは力抜くこと寒椿  
大寒のきらり振り向くイヤリング

頬よせて 田所節子

枝剪られ雄々しくなりぬ冬銀杏  
しなしなとゆふぐれ色の懸大根  
里の灯のふゆる早さや冬夕焼  
頬よせて葉牡丹笑ひ合つてをり  
メタリックに日ざしを返す凍り滝  
あの世まで黙しゆく氣の大海鼠

自在鉤 渡部節郎

電線に結び目となり寒雀  
背筋より突き離れたき冬の月  
枯尾花夕日に染まる白さかな  
善哉に餅の焦げ目の甘さかな  
どんど火に片目のままの達磨かな  
自在鉤いぶして聴くや虎落笛

福寿草 鈴木良戈

福寿草診察室の濃き朝日  
湖に冬さざ波や揚花火  
牡蠣飯の熱きに頬をゆるめけり  
木場堀の木造新船松の内  
楯足して寡黙の人を増やしけり  
凍星や往診依頼ただならず

冬 日 上谷昌憲

極上の冬日に展ぐスポーツ紙  
駅長の長き指差し雪ぼたる  
鳩浮かぶ水は空より空のいろ

天窓の正方形の淑気かな  
読初の今更アガサ・クリステイ  
日暮には禽のあつまる冬櫛

日脚伸ぶ 河口仁志

地球儀のかすかな自転初明り  
主治医告ぐ一語一語の寒さかな  
凍鶴の動くかに見ゆ水の音  
どんどの子行きも帰りも犬連れて  
羽子突きに仮退院の子もをりぬ  
日脚伸ぶ紙一枚の向う側

加護 淵上千津

生き耐へて片減り余すお食積  
寒入りの鍼脳天にひびきけり  
真田ひも解かざるもあり寒の書庫  
厳冬の保管庫和紙の深ねむり  
寒満月難民に加護たれ給へ  
暖冬晴うかと忘るる地球の禍

# 潮鳴集



数字無限

荒木澤子

初曆数字無限の底力  
また明日の序曲生まるる冬銀河  
裸木の天を支ふる力瘤  
読初は「沖」に一礼心して  
水仙に接写のカメラ空蒼し

窯の火

佐々木よし子

紙漉女いくたび水の機嫌とる  
月出でてからの賑はひ年の市  
潮焼の腕がつちり大根引く  
猪鍋や雨のやさしき文士宿  
雪来るぞくるぞと窯の火が真つ赤

掌

中

菊地光子

一日一生掌中の寒卯  
負け独楽に極彩色の豊かなり  
打ち返す波の三角冬怒濤  
息継ぎをしばし忘るる寒の鯉  
ビル影をビルの負ひある四温晴

セカンド

菊川俊朗

銭洗ふ人を見てある十二月  
年の市妻はずんずん先をゆく  
水鳥の魔法解かるるまで待つか  
綾取の川の取り方忘れたる  
セカンドの無くて冬田の野球かな

浮力 峰崎成規

柚子風呂や記憶にはかに浮力帯び  
心底の見えぬ海鼠の腹喰らふ  
若水や太古の海を血は覚ゆ  
ページ繰る音の合間へ雪しんしん  
街騒の消ゆるひととき寒夕焼

先のさき 荒井千瑳子

大北風や本音洩らさぬ意地つ張り  
先のさき見ゆるも怖し枯野行く  
ふるさとへ弥増す思ひ初山河  
板壁を冬日の漏るる芝居小屋  
こぼしては気づく幸せ竜の玉

冬木の芽 齊藤實

木の葉散る孤独な奴と群れる奴  
白失せて佳境に入りぬ干大根  
世の中の力点となるお正月  
辛抱の拳となりて冬木の芽  
角樽の赤に鬼の気年新た

蒲団干す 福島茂

神の留守鼈甲あめの透き通る  
雪山を手繰り寄せたる最上川  
人の臭ひすつかり消して日向ぼこ  
たかが介護されど介護の蒲団干す  
ピストルを忍ばすやうに懐手

魔女の声 栗原公子

お喋りな家電侍らせ冬籠  
冴ゆる夜や口笛の行く歩道橋  
木枯や魔女の声まね読む絵本  
丁寧に生きるつもりや日記買ふ  
菰巻の松くろがねの肌を持ち

初風 大沢美智子

初風や男松由由しき御用邸  
冬すずめ朽ち葉と吹かれ朽ち葉いろ  
雪嶺の空の続きや蒲団干す  
僧なだれ込む底冷えの荒行堂  
抜かれ飛ぶ成人の日のコルク栓

# 沖作品



## 能村研三選

ポインセチアこんなに華麗なる嘘を

ジャズ低く流れ山茶花時雨かな

凧やきゆつと心も靴紐も

鉄削るミクロンの音寒の月

海鳴りに初心をつなぐ去年今年

鯨起し海へ傾斜の能登瓦

狼の眼のなかにある月明り

大川に舟が船曳く年の暮

わつしよいと地球を蹴りて霜柱

スクラムはラガーの真髓一步前

初富士のぬつと顔出す九十九折

初詣琴平宮の階百段

笑はせて哀しき貌や回し猿

ふつふつと自愛のための七日粥

定番の話で果つる女正月

市川市

小林 陽子

千葉

坂本 徹

清部 祥子

晴れ渡る雪の石鎚山帰郷せし

ゆくりなく冬の紅葉に迎へらる

冬の蜂玻璃戸を滑りつひに落つ

川音の冴えて小さき夜の橋

あんなにも高きを舞うて落葉かな

楫のくれなゐは汝の頸動脈

行く秋の船石に彫るロシア銘

落葉降る墓碑名おほかた艦船員

空部屋の冬日を刻む掛時計

巨艦めく島へ一撃冬怒濤

古稀過ぎの発心新た初日出づ

若水の一口に湧く力かな

朴落葉吹き寄せらるることもなし

喉飴を配り加はる日向ぼこ

惜敗のラガーの仰ぐ虚空かな

竹内タカミ

長崎

田川美根子

千葉

塩野谷慎吾

# 沖作品 15句選評

\*

能村研三

ポインセチアこんなに華麗なる嘘を

小林 陽子

ポインセチアは、クリスマスの頃になると街中に現れる定番の花だが、赤と緑の鮮やかなコントラストがクリスマスを感じさせてくれる。しかし鮮やかに赤く色づいているのは、花ではなく苞葉という葉の一種で、真ん中に小さく黄色く見えるものが本物の花で花びらはない。角川源義に「ポインセチア愛の一語の虚美かな」という句があるが、ポインセチアは真赤な花を咲かせているが、葉っぱであることは正に華麗な嘘と言っても過言ではない。

狼の眼のなかにある月明り

坂本 徹

登四郎句碑がある奈良県の東吉野村は日本最後の狼がいた所

でブロンズ像が建っている。かつて明治の初めまで本州、四国などに多くいたそうだが、絶滅してしまった。しかし狼は精神な顔つきで犬にはない力強さがあり、古来山の神の使者として信仰の対象ともされていた。狼の瞳は暗闇の中でも物を見やすく傍から見ると光っている。月明りを瞳に映し狼の遠吠えが聞こえてくるようである。

初富士のぬつと顔出す九十九折 清部 祥子

初富士の凜とした気高さは、眺める人の情感をわきたててくれる。初富士は、元旦の富士のことで、日本一の「富士山」は高さだけでなく、白雪を冠した優美な姿を見せてくれ、神々の宿る霊峰として崇められてきた。また、「一富士二鷹三茄子」の言葉があるように、富士は目出度さの象徴でもある。軍で出かけた折、九十九折峠道を登るにつれ、カブを切る度に初富士がぬつと顔を出してくれた。

冬の蜂 玻璃戸を滑りつひに落つ 竹内タカミ

冬、蜂は体力温存のため、巣の中で仮死状態になって眠っているが、暖かな日には眠りから覚めて、夢うつつで徘徊したりする。動かないことが多く、飛んでもその姿は弱々しい。冬日差しを求めて、玻璃戸に縋りつき痩せ細った「冬の蜂」をしばらく観察した。しかし遂に滑り落ちてしまった。

〈以下略〉